

周 総 理 と 池 田 先 生 —会見前後の知られざる秘話—

三 津 木 俊 幸

みなさん、こんばんは。今ご紹介がございましたように、これから周総理と池田先生についての「会見前後の知られざる秘話」という大変重たいテーマでございますけれども、私の知る範囲で講演をさせていただきます。

今、高橋副センター長からご紹介がございましたように、今日の聖教新聞の一面で「『周総理と池田大作』日本で発刊」と報道されました。実はこの本は南開大学の周恩来研究センターの所長さんと創価大学の、さきほど司会をされました高橋さん、今日そちらにも見えておりますけれども、聖教新聞の川崎さん等が共同いたしました、周恩来と池田先生の研究を、出された本がこの中国版でございます。今大変中国では評判になっております。この本の一番凄いことは何かといいますと、内容もさることながら、この本が中央文献出版社という、中国では国家の指導者のすべての文献を収録している出版社から池田先生と周総理の本が出版されたという自体も大変凄いことであると西園寺一晃さんが申しております。この本がまもなく来年の1月に日本語版で出版される事になったというのが今日のこの聖教新聞でございます。ご承知のように今日は池田先生と周総理が会見をされたという歴史的な記念日でもございますし、ちょうど27年前の今日の夜9時すぎに、池田先生が北京の305病院で会見されました。この会見は最初で最後となった会見でございます。

私は創価学会の中国担当の仕事をさせて頂きまして、20年になりました。その間、池田先生の訪中に同行して、要人との会見の様子、中国の友人の方々から直接伺った話をまとめてお話させて頂きたいと思っております。残念ながら私は周総理には直接お会いすることは出来ませんでした。周総理夫人や周総理と共に仕事をされた方、池田先生と周総理会見の通訳をされた方、そして、新華社の記者などから私が直接伺ったものや、私の手元にある、文証、テープ等の証拠に基いてお話しするものであり、今日、初めてここに皆さんに、披露するものもございます。

話の進め方は、池田先生と周総理の出会いについて、3つに分けて、会見前、いわゆる国交回復以前の出来事。そして会見。そして最後に会見後の事柄につきて、その知られざるエピソードをお話したいと思います。

会見前のことでございますが、ご承知のように、1960年代前半にさかのぼります。今から40年前になりますけれども、1960年代前半、自民党で閣僚経験者でありました、高崎達之助氏、松村謙三氏等の、党派を越え、思想を越え、日中国交回復を自らの悲願とし、何度も訪中し、友好を推進した人物の存在をあげねばなりません。

両氏は訪中の折には彼らの立場で、池田先生や創価学会の日本における状況、将来日本の一大勢力になるなどの情報を周総理に伝えていました。

創価学会に関心を持ち、創価学会に連絡をとり、幹部と接触せよと周総理が直接に指示したのは二人です。ひとりには孫平化さんで、1960年代初頭、日本を視察した元中日友好協会会長でございました。残念ながら5年前に亡くなりました。もうひとりには仏教協会会長、趙朴初さんでありました。趙さんも亡くなりましたが周総理はこの二人に直接指示したわけであります。高崎・松村両氏からの池田名誉会長の言動や、創価学会が民衆の中に定着している様子が周総理に適確に伝わっていたがゆえに、周総理から孫平化さんへの指示になったものと推察されます。趙朴初さんはその後池田先生と日本で会見し、会見を記念した桜は現在聖教新聞社の庭に記念の桜として植えられてあります。もし聖教新聞社に行かれた方は聖教新聞社の庭に植えられてありますので、記念としてご覧になって頂ければと思います。

当時、中国では創価学会をどのような団体と見ていたのか。また周総理が、どのように指示したのかを孫平化さんの話を直接聞いていただいた方がよいと思います。

1989年1月に中日友好協会代表団として招待したおり、孫平化会長が香川の創価学会四国文化会館で講演されました。その講演の中で、周総理がどのように指示していたのが述べられておりますし、また創価学会を中国がどのように見ていたのかということが分りますので、その中の一部ですが、抜粋致しましたので、お聞きください。

「友人のみなさんこんばんは。今の歌を聞いた方がいいんじゃないかしらね。座らせていただきます。本来は通訳を通じてしゃべりたいんだけど、三津木副会長さんは「あなたはね、日本語でしゃべりなさい」と。「四国の学会の友人の皆さんはあなたの日本語をテストしたい」と。やむを得ない。ストレートでいきますから。もし話の中分らない所があれば、すぐ手を挙げて。となりは日本語の達者の方ばかりおりますから、早速訂正いた

します。

皆さんに率直に申し上げますと、池田名誉会長が中国にみえるまで、我々は創価学会に対して、理解が足りなかったです。あるいは誤解するところもありました。どういうことかといいますと、つまり創価学会は日本で恐ろしい団体だと。非常に組織された部隊で、もう人数も多くて、相当な力を持っていますから、統率力はすごいんだと。その時は皆さんご承知のように、日本は軍国主義復活するかどうか危惧されているから、こういうような団体は恐ろしいと危ないと。なぜそういう認識を得たかかというと、つまり我々の耳の中に入ったこと、あるいは我々の手元を書いてある資料、偏ってるから。一面的なものでしかない。そういうような間違ってた認識を得たわけです。それで認識は団体に接触いたしまして、改めたわけです。ですから、我々の亡くなられた先輩、恩師でもある、廖承志先生、我々の尊敬する指導者、周恩来先生、その創価学会という団体は重視しなければならないと教えられたわけです。いつのことであるか、記憶がありませんが、私は日本を訪問しまして、帰った後、周恩来総理に報告したと思います。報告した後、その日本の社会現象としていろいろ触れた時にですね、つまり、2つの事をですね、非常に注意を払ったわけです。1つは高速道路。その頃は初めて作ったときですね。大体橋というものは川にかけて、今は瀬戸大橋を架けているんだけど、陸地の上に橋をかけて車が走るのは、なかなか考えがなかったものですから、これは素晴らしいと。これは相当セメントと鉄がなければできないと。もう1つですね、創価学会という団体は君たちは重視しなければならない。会員の数から言えば、10人の日本人の中一人学会員です。そういうような、ざっと計算すればそういうことになるわけです。これを社会の非常に大きな力です。中日友好を進めるには無視するわけにはいきません。あなたたち中日友好をやっている者はやはり、何とか創価学会との間、交流パイプを作らなければなりません。友人を作らなければなりません。そういうようなご指示でした。それからそのころ、中日関係がまだ難しい時、皆さんはよくご存知の、松村謙三先生とか高崎達之助先生が中国にみえた時、雑談の中にこういうにおっしゃったことがあります。

あなたは度々日本に訪問に来るんだけど、池田大作先生に会ってくださいと。会うべきだと思います。なぜかというと、若くて、十分に勉強してますと。あなたたちの読んでいる『毛沢東全集』はすべて読んでいます。そういう風におっしゃった事があります。それから周恩来総理は趙朴初先生に指示したこともあります。皆さんご存知のように趙朴初先生は中国では仏教会、仏教のことについては第一人者です。非常に詳しい。趙朴初さんに指示して、もし日本に行ったら、日本の創価学会と、もし機会があれば、チャンスがあれば、関係を作りなさいと趙朴初さんに指示したこともありました」

孫平化さんの講演は1時間にわたりました。お聞きのとおり周総理から直接指示を受けたことのひとつは、日本の立体高速道路の研究。将来中国も交通渋滞になるであろうから、いまから研究しなさいということに対して、陸の上に橋をかけるなんて中国は土地が広いから必要がないのではないかと、初めはあまり乗り気でなかったと孫平化さんは冗談に言っておりましたけれども。それと創価学会の幹部に接触せよということでした。

もう一人の趙朴初さんは周総理のご指示を忠実に守りまして、日本に来た時一番最初に先生に聖教新聞社でお会いし、その時の記念の植樹が趙朴初さんの桜として現在残っていることをご紹介します。

孫平化は周総理のご指示にもかかわらず、3～4年ブランクがありました。というのは創価学会と接触する機会がなかったんです。孫平化さんは日本に来るチャンスもありませんでしたし、当然国交回復前ですから日本から行くわけございません。ところが大きな出来事が一つ起こりました。創価学会と中国との初めての会見が実現したんです。これは1966年7月のことでございます。経過は以下の通りであります。

作家の有吉佐和子さん、皆さんご存知とはおもいますけれど、有名な女流作家の有吉さんが一役買っていたんです。この有吉佐和子さんと池田先生は文学を通じて交流がありました。何回目かの文学の懇談が終わった時に有吉さんは、池田先生が大変中国に対し友好的であり、興味を示されているとの自らの判断で、有吉さんの友人の劉徳有さんに電話をしました。劉徳有さんは光明日報の記者でありまして、非常に文学に通じている方でありまして、のちに中国の文化部副大臣になられた方で、現在も北京で活躍中であられます。有吉さんいわく「劉さん、今、日本には創価学会というまじめな団体がある。若い人が多く礼儀正しい人たちの団体だ。一度あっていただけないか」という有吉さんの電話が劉さんにありました。

これを聞いた劉徳有さんは早速L T貿易東京事務所の孫平化首席代表に報告しました。劉徳有さんは、かつて、孫平化さんには周総理から創価学会の幹部に接触せよという宿題が出ていることを知っております。孫平化さんは今までそういうキッカケがなかったので渡りに船だということで、早速創価学会の幹部との会談を応諾したわけです。

有吉佐和子さんは早速創価学会の秋谷青年部長（現会長）に連絡をしました。この連絡を受けた秋谷青年部長は、池田先生の指示を受けました。池田会長は「日中友好を深める上で重要な機会だ。秋谷青年部長を中心に幹部で会ったらどうか」と快諾しました。その返事によりまして、有吉佐和子さんが仲介役となり、日本側は当時秋谷青年部長、現在の創価大学の岡安理事長、今日はじめて申し上げますけれども、岡安さんは当時青年部でございました。当時聖教新聞記者であり、現在は公明党の議員であります市川雄一さん、こ

の3人が青年部の幹部として、日本側として選ばれました。中国側は劉徳有さん、孫平化さん、もう一人大公報記者、劉宗孟さんという方で、この方は存命中ではありますが病氣療養中ということでもあります。この3対3、それに有吉さんが入って、港区の八芳園で会見が行なわれたわけです。

この孫平化さんは先程ブランクがあったといいましたけれど、その後1964年にLT貿易、Lは廖承志、Tは高崎達之助、この両方で交わされた貿易協定によって、日本首席代表として赴任しました。同じ年の9月に日中記者協定により、日本に駐在記者として初めて赴任をしており、2人とも日本にいましたから、この会見がスムーズにいった訳でございます。私はこの会見がどのような内容であったのかを先月劉徳有さんに電話で確認しました。劉さんにどんな話をされたんですかと聞きましたら、劉徳有さんいわく「初めての創価学会との接触なので、あまり立ち入った話はしないとの大方針でのぞみました。あしように、こうしようということは決めないで、とにかく会おうということで会いましたので、あまり記憶がないんです」「会ったという報告は周総理にされましたか」と言ったら「当時私たち新華社および光明日報は、LT貿易日本事務所の管轄下にありまして、上司は孫平化さんだったんです。ですから当然孫平化さんが報告したものと思われます」という話でございます。けれども、そういう経過から、はじめてのともかくも歴史的な会見が行なわれたわけでございます。日本側の秋谷会長に聞いてみました。「会長どんな話しましたか」と。「うーん、あの時はですね、一番話したのは劉徳有さんでした。その時の私の記憶の内容は覇権の問題だったと思います。覇権問題で劉徳有と私は議論が百出した記憶があります」というのが会長の話でございました。全会見の詳細はわかりません。ともかく会見したという事実、これは恐らく周総理に打電されたことは間違いないと思います。

そういうことがありまして、あの歴史的な1968年の学生部総会における池田先生の日中国交回復提言が行なわれたわけでございます。これも周総理に池田先生がお会いする前の大きな出来事の一つでございました。この内容につきましては、劉徳有記者が中国に大きなニュースとして打電致しました。このときの先生の提言は皆さんもご存知だと思いますけれども、大綱4つあります。どんな提言をされたかという、日本のとるべき態度について、一つ目は、中国の政権の存在を正式に認めること。二つ目は国連における正当な席を用意いたしまして、国際的な討議の場に登場もらう事、三つ目が経済的、文化的な交流を推進する、四つ目は両国の首脳が話し合い、基本的な平和への意思を確認し、大局観、基本線から固めていく解決策を提唱したわけでございます。

このニュースは大ニュースで劉徳有さんはじめ、新華社の記者が何人が集まって打電しました。けれども、劉さんの話によりますと、学生部総会には行っていませんでしたので、

翌日の聖教新聞を見てびっくり、共同通信の記事を見てびっくり。いうことで、翌日か翌々日か聖教新聞を全部見て、まとめて打電をしたと言っておりました。、画期的なニュースでございます。

中国におくられたニュースが、どういう風に中国に報道されたかということが、近年までは全くわかりませんでした。記事を送った本人の劉徳有さんに、「劉さん、これは中国ではどういう風に報道されましたか?」と聞きましたら劉徳有さんは「おそらく当時の中国では、創価学会のことがあまり知られていなかったのも、人民日報にも、光明日報にも扱われなかったと思う。もしかしたら、新華社の参考消息という内部資料ですけれども、そこに扱われたかもしれません」という返事でした。それ以来私もどこにその記事が載ったかということは追及はしなかったんです。

ちょうど私の古い友人で新華社の元参考消息の主任をしていた李徳安さんという人が、17、8年来の友人でして、彼を思い出しまして、彼に聞いてみようと、お願いしました。「ことによったら、参考消息の1968年の9月か10月でその辺でないか」と調べてみましたが、ともかく33年前の記事ですから、彼は引き受けたものの、1年間全く返事がなかったんです。私も諦めておりましたら、今年（2001年）の9月になりまして、彼から手紙とその参考消息を発見したという、感動的な手紙と記事のコピーを送ってくれました。

手紙の中に苦労して探した事を中国語でいうと、彼の手紙の中では「九牛二虎之力」、私のへたな発音でいうと「JIU NIU ER HU ZHI LI」ていうのかな。要するに有らん限りの力を出して探したとこういう意味ですね。今日はこの33年前、この記事がどういう風に報道されたか映像で映し出しますので、参考にご覧になってください。

右のほうに1968年9月11日付けの参考消息で内部資料、取り扱い注意となっております。これは取り扱い注意になっておりますけれども、ちゃんと当局にお願いいたしまして、報道してもいいということで許可をとってあります。そこで、今日は皆さんに初公開をしたわけでございます。これが先生が提言をしたことが間違いなく中国で報道されたという調査でございます。その後、この記事をもとにして様々展開するわけです。

この記事は中国語ですので、全部はわかりませんが、李徳安さんはこの記事を見た時「人民日報や光明日報の記事を探したがなかった。その後、新華社の参考消息に一縷の望みを託して、今年の9月（2001年9月）のある澄み切った秋晴れの午後、図書館にて1968年9月11日付の第一面を捲った途端、『池田大作、日本の反中国中止及び我が国との国交樹立を主張』の大見出しが、恰も火花を散らすが如く瞬時にして私の眼前に踊ったではないか。私はそれを一気に読み終えるや、しばし当時の追憶に思いをはせた。」とこういう文を寄せてくださいました。この李徳安さんも大感動したんですね。私も大感動いたしました。

これが、先生の発言の間違った証拠だという確証になったわけでございます。

しかし、この報道の後で、学会本部には嫌がらせの右翼の街宣車、嫌がらせの電話等々が寄せられ、また中には池田先生が本部幹部会で赤いネクタイをしますと、池田大作は赤の手先だと。いつから中国側になったんだという批判までされました。

今日これから申し上げるのは、もう解禁になったから申し上げますけれども、そういう右翼とかだけではなくて、日本の外務省も池田先生に対して快く思っていなかったということが、最近公開された秘密文書であきらかになりました。

アメリカの外交機密文書が6年前サンケイ新聞に紹介されました。池田先生のことにつきまして、『創価学会の民間外交を懸念』というタイトルで 外務省首脳がアメリカに、池田先生の発言は日本としても憂慮すべき問題だと言っているんですね。

サンケイ新聞を紹介するとこう書いてあります。1960年代末に外務省首脳が創価学会池田大作現名誉会長の民間外交を日本外交の妨害になるとして、米国政府との協議の場で同会長を強く非難していた事がこのほど解禁された米国政府の秘密文書で明らかとなった。日本側は牛場信彦外務次官、東郷文彦北米局長、木幡久男防衛次官が出席した。中国は日米のかかわるすべての問題に影響を及ぼすが、米国から見て中国は非常に不安定だ。日本側は中国になにか基本的な変化がおきていると思うか、というアメリカ側からの質問に対して、牛場次官は、創価学会の池田会長の最近の言明は中国に対しひどく誤った期待を高めさせることになった、と強い表現で池田会長非難の意を米側に表明した。牛場氏のいう「池田会長の最近の言明」とは1968年9月8日、すなわち学生部総会の発言ですが、日本政府の外交の障害になると強い不満を抱いていたことを表している。日本の外務省も先生の提言に対しては快く思っていないという事が、最近の機密文書で明らかになったわけでございます。

これを見ますと、日本の対米追従外交が盛んであった時期に池田先生の勇気ある発言であったということもわかります。また、先生の講演が先見性に富むものであったかということもよくわかります。会見前にこういう事が種々ある中で、講演のたった4年後に国交回復がされるわけであります。あの時の外務省の批判は何だったのかと思うくらいのその当時の情勢はそういう状況でございました。

その外務省の反対とは全然別個に、松村謙三さん、高崎達之助さんという方々は、党派を越えて、日中国交回復をやりたいということで、周総理にも何回もお会いしました。高崎達之助さんは昭和30年、周総理に創価学会のことをこのように紹介した。「今は小さな勢力かもしれませんが、民衆に受け入れられている団体があります。それは創価学会という団体です」と。周総理が初めて創価学会という名前を知ったのは高崎さんの発言からで

す。今から41年前に周総理の中にインプットされたんですね。彼は自民党の代議士でしたが、党派イデオロギーを超えて、周総理との親交を深めていた方でございます。非常に不思議な事に、高崎さんは創価学会本部の近所に住んでおられまして、今はそこにはありませんけれども、孫平化さんが日本に来た時に、案内した時、「ああ、この辺に高崎さんの家がありましたよね」といっていました。

松村謙三さんとの言葉もでございます。松村謙三さんが池田先生と会った時の話を先に申し上げます。池田先生と会見をされた時、松村謙三さんは87歳で厚生大臣、文部大臣を経験されておりました。先生の講演を見て、今後の日中友好の後事を託すのは池田先生しかないということで、先生を訪ねてきました。場所は渋谷の国際友好会館です。池田先生に「是非私と一緒に中国に行って頂きたい」という話をしました。「私は年をとりすぎました。今後の事を池田先生に託したい。私と一緒に中国に行ってください。周総理に会ってください。ご紹介しますから。」とこういうことでもございました。先生は「ありがたい話ではありますけれども、私は宗教者であります。創価学会は仏教団体でもありますので、今の中国は社会主義体制で、日蓮大聖人の御書を送っても、仏教書ということでなかなか相手に届かない時代であります。したがって、宗教者という次元ではなかなか行くことはできません。先生の依頼はよくわかりましたので、国交回復は政治の次元でやったほうがいいと思います。私の作った公明党がありますので、公明党の代表に行ってもらいましょう」ということで池田先生は松村謙三さんに公明党を紹介し、松村謙三さんとがよく打ち合わせしながら、訪中して日中国交回復の調印という形になるわけでもございます。

公明党が日中国交回復の調印について私がずっと調べている中で、感動しましたのは、なぜ周総理が国交回復の重要な項目を公明党に託したかということです。その当時は自民党が与党。野党第一党は社会党であります。公明党は結党7～8年の小さい党。その党に日中国交の重要な項目を周総理は託した。周総理は公明党に対してあまり理解はなかったんですけれども、公明党を作った池田先生のことは、高崎さんや松村さんの話、先生の発言、孫平化の報告など、様々なことでわかったもので、池田先生の作った公明党なら間違いないという判断で、それを託されたのではないかと私は思います。めでたく1972年9月29日に国交正常化の調印がされるわけです。

続きまして、国交回復後、先生と周総理との会見について、今日はほとんど初めて聞く話も申し上げますので、期待していただきたいと思います。

周総理と先生の会見は1974年12月5日であります。これは先生の第二次訪中でありました。実は先生が初訪中した、1974年5月に周総理はお会いしたいという予定でした。しかし、周総理は癌の手術直後で、どうしても起きられないということでしたので、先生はお

会いしないで帰った。周総理はどうしても先生にお会いしたかったと、趙風さんという中央音楽学院の名誉院長がいておりました。私も何回かお会いしましたが、残念ながら今年の9月（2001）年に亡くなりました。二年前に彼に会った時にこういう話をしてくれました。この趙風さんは廖承志さんと周総理の下で一時仕事をしていたことがあり、池田先生と周総理との会見は第一次訪中の時にやる予定だったという事を廖承志さんが趙風さんに話してくれた。「周総理は、病気が非常に重かったころ、」1974年5月のことですけれども「本当は池田先生と会見する予定だったことはあなたも、知っているだろう。しかし、周総理は仕方なく『もう少し、良くなってからにしよう』とおっしゃったのだ。廖承志同志は独特の微笑を浮かべて、話を終え、慣れた仕草で私のおなかをたたいて、」趙風さんは非常におなかの大きな人で、おなかをポンポンと叩いて「『おでぶさん!これでよくわかっただろう』この光景は永遠に忘れ得ぬ思い出の一つである」

先生の第一次訪中に会う予定だったという周総理の気持ちを廖承志さんもわかっていたし、そのことを趙風さんもわかったということでございます。

ともかく第一次はお会いできなくて先生は帰られました。1974年12月5日昼間、当時副首相の鄧小平さんに会った。鄧小平さんから「周総理は病が重くて、お会いできず、申し訳ありません」との言葉がありました。先生は「周総理によりしくお伝えください。明日帰りますから」と鄧小平さんにご挨拶して夜、答礼宴をやった。答礼宴がまもなく終わるころ、当時日中友好協会の会長の廖承志さんが、「池田先生ちょっとお話があります」「なんですか?」「周総理がお会いしたいと申しています」先生はお断りした。「周総理は重病ですからお会いすることはご遠慮させていただきます」「周総理がお会いしたといっているんです。是非お願いします」と。その話を聞いて、全然お会いするという予定もなかったのもので、先生以下訪中団が大慌てで準備をし、周総理に会った。

会見については二年前に、当時通訳をやった林麗韜さんが創価大学に来た時に、八王子からホテルに送る車の中で、林麗韜さんから伺った重要な話なんです。

「実は池田先生の答礼宴が終わった後車でお迎えに行きました。非常に寒い日で、池田先生の奥様は日本から着てきたコートを着ていたんですが、それでは寒いからといって、中国の人民解放軍が着るような厚いコートをオーバーの上にお着せしました。そのコートは我が家に記念として大切にしております。という話です。これは30年になろうとする今、まだ残っているという話です。会見につきましても西園寺一晃さんも言っておりましたが、周総理は池田先生に会いたがっていた。医者は反対した。両者対立。とうとう医師団は奥さんの鄧穎超さんに「どうしたらいいでしょうか」と言った。鄧穎超さんは「あんなに会いたがっているのだから、会わせてください」という一言で会見が実現したんで

す。これも林麗韞さんから車の中で聞いた話ですけども、「会見が始まってしばらくたってから1枚のメモが私にまわってきました。それは医者からのものです。私はそのメモをそっと総理に渡したのですが、総理はそれには目を通さずに池田先生と会見をつづけられたことを良く覚えています」と。私はそのお話を聞いた時に感動いたしました。それでこの話は重要なので、是非残しておきたいと、林麗韞さんのおっしゃったことをメモにしました。それを林麗韞さんに見せたんです。これが聖教新聞に載せたり、講演に使用させて下さいと申しました。林麗韞さんは、言い回しに一部、こういう風に言ってくださいと手を入れてくれたメモが私の手元だけに残っております。それが先程私が話した内容です。

私はこれを聞いた時に、周総理は自分の体の事を顧みずに会見された、友情、気迫を感じました。医者のメモを無視して会見をする総理の姿からは、本当に池田先生にお会いしたかったからというメッセージが周総理から池田先生に伝わっていったと私は思います。周総理は医者から反対されていたわけです。それをあの鄧穎超さんの一言で会見をした。さらに周総理はメモを見ないでそのまま、会見を続けられた。我々も経験がありますけれども、会見中メモが廻ってくると嫌なものです。会見を切り上げろという意味だなと思うわけですけれども。周総理は医者からのメモだなとわかっていたんでしょう、全部わかっていて、メモを見ないで先生とずっと会見をされた。この周総理の真心、友情、大変私は素晴らしいと思いますけれども、皆さんいかがでしょうか。(拍手)

その時、先生は周総理に一枚の絵を贈られました。池田先生が周総理に贈ったことが、当時の人民日報に紹介されたんですね。このように紹介されました。当時の国家文物管理局長の王冶秋さんが日本に来た時に、日本の友人からもらった富士山の版画の絵がありました。その絵を周総理にお見舞いに王冶秋さんも差し上げたつもりでいたんですね。12月5日に池田先生が訪問して、絵を差し上げたものですから、周総理は王冶秋さんに手紙を書いた。「今晚池田大作先生がきて絵を買ったので、あなたの絵はお返しいたします」という手紙でした。王冶秋さんは周総理にこの絵をあげたときの状況をこういう風にいっておりました。「1973年日本で展覧会を開催の折訪問、お土産に、版画『富士山の絵』をもらい、事務所にかけ毎日見ていました。1974年12月、周総理の病気が重いと聞いて、周総理は日本に留学していたから、この絵を総理の病氣見舞いに贈りました。周総理は病室にかけて見ていました。あの恥知らず者どもの叫びを聞くより、よほど、絵を見ていただくほうがよいと思って。

この時はまさに、「4人組」がきわめて陰険に、あくらつな攻撃を周総理に行なっていたところである。

私が、その絵を贈ったのち、しばらくしてから、総理は人を派遣して絵を返してきた。1

通の手紙を添えて。それは周総理のえんぴつで書いた直筆のものでした。」

内容は、「冶秋同志：あなたのご好意に感謝します。日本の版画は、すでに何回も鑑賞いたしました。今晚、池田大作先生が私に、別に、1枚の絵を贈ってくれましたので、あなたからもらった贈り物をお返し致します。私は病気療養中ですが、状況は小康状態ですので、ご安心下さい。 周恩来 1974年12月5日」まさに先生がお会いした日でございます。周総理が直筆で池田先生のお名前を書いたのはこれが最初で最後です。この書信集につきましては『池田大作と周恩来』と同じ出版社、中央文献出版社から周恩来の書信集に池田先生の名前が入って収録されております。池田先生が絵を贈られたということは間違いのない、ひとつの証拠でございます。

この手紙にはいろいろな意味が含まれます。

まず一つは、周総理が池田先生の名前を書いてくださった、最初で最後の貴重な資料です。

そして、四人組がこの時どんな状況であったかもわかります。先程も、恥知らずの者どもと王冶秋さんがいっていた通り、文革時代、さんざん暴れ回った紅衛兵の時代ですから。

もう一つは、池田先生が周総理を訪問したのは夜の9時すぎです。会見は記録によれば、9:50—10:20の30分間です。周総理は病人ですから休まなくてははいけない。けれど休まないでこの手紙を王冶秋さんに書かれた。しかも人をつかわして、その日のうちにその絵を返したという、一人の人に対するまごころに感じざるを得ません。

次に述べるのも、将来の周総理を研究する方々の貴重な資料として残しておきたいと思います。

10年前に創価学会が周恩来展を開催しようという時、先生が贈られたこの絵は是非展示したいなと思っておりましたら、中国革命博物館にある。それは色々な理由で、途中他の団体に開催を譲ったいきさつがあります。しかし、来年中部の青年部が周恩来展を1月18日に開催する事になりましたので、この絵に里帰りをお願いしようと、中国革命歴史博物館にお手紙を書き、電話をしたら、池田名誉会長から贈呈された絵はありますよとの返事でした。絵を貸してくださいというのはちょっと難しいので、せめて写真を送ってくださいとお願いして、送って頂いた写真がこれでございます。萩と御所車という日本画があります。これが北京の中国革命博物館に保存されてまして、今日皆さんに27年ぶりに里帰りの絵でございます。

中国革命博物館からの手紙によれば、「貴会で行なわれる『周総理と池田先生展』を行なう旨、非常に喜ばしく思います。当館では池田先生が周総理に贈られた風景画、我が博物館の登録日時は1975年1月9日です。」と書面できております。革命博物館の公文書で

ざいます。これも非常に重要なんですね。ある人は先生が贈った絵を周総理は死ぬまで見てたという文を書いている人がいますけれども、これは間違いです。1975年1月9日に登記されました。池田先生は1974年12月5日にお見舞いしたあと約1ヶ月くらいは周総理は絵をご覧になっているんじゃないかということが、博物館の文書で明らかになります。この絵を池田先生は周総理に直接お渡ししたのかを、当時池田先生に随行した人々に聞いてみたのですが、誰も記憶にない。その後いろいろ調べたところ、実はこの日の昼間、鄧小平に会ったときには、先生に会えないという前提で周総理に宜しくお伝えくださいと、この絵を持っていったと。鄧小平が預かった。それを周総理に届けた、それが事実のようです。歴史というのは正確にしておかなくてはならないと思います。

先生は会見後、周総理に「是非桜の咲く所に日本にきてください」とお願いしたんですけども、周総理は「その願望はありますが、無理でしょう」と答えたという有名なやりとりがあります。当時周総理は癌におかされておりましたから。先生は帰ってきてから中国から創価大学に留学生中の6人をお願いいたしまして、創価大学の入寮式の時に、創価大学の文学の池のところに植えたのが周桜です。先生が周桜と命名して、揮毫した石は中国の周総理のほうに向かって建てられているわけでありまして。日本には周総理の記念碑は2つありまして、一つは創価大学の周桜です。もう一つは京都嵐山「雨中嵐山」ということで、周総理が京都を観光した時の詩を廖承志さんが書いたものを刻んだ石碑があります。歴史からいいますと創価大学の周桜のほうが4年も早くできてまして、「雨中嵐山」の方は弟でありますので、日本の中での古い歴史は創価大学の周桜であることも申し上げておきたいと思います。

その周桜を植えた人は、今生き証人でございますけれども、6人おりました。全部45歳から48歳の働き盛りです。

許金平さんは日本大使館参事官。大使、公使、参事官ですので、上から3番目です。程永華さん。この前まで日本大使公使だったんですけども、中国へ帰りまして、中国外交部アジア局副局長です。滕安軍さん。この前まで大阪総領事館副総領事、帰りまして、中国外交部アジア局参事官。劉子敬さん、中日友好協会友好交流部、部長。李佩さん、東武トラベル北京駐在代表。李冬萍さん、中国共産党連絡部経済センター副主任。ということで、全員が日中友好の最先端でがんばっているメンバーです。許金平さんも今中国大使館の参事官ですから、「来年周桜やりますよ」と言ったら「私は絶対行きますよ」と。中研の皆様いいですか？（「はい」と会場から）歓迎してください。生き証人が必ず4月に行きますので、よろしくお願いします。

鄧穎超さんが周総理が亡くなってから来日した。その時に、鄧穎超さんに創大の周桜を見

にきてくださいとお願いしたんですけれども、鄧穎超さんの日程の都合がつかず、池田先生は、今度は周夫婦桜を植えました。(1979年のこと)先生と当時全青連代表で日本にきていた高占祥(当時全青連副首席)さんの二人が直接植えました。くり返しますが、周桜は6人の留学生が植えた。周夫婦桜は先生と高占祥さんの2人で植えました。中研の皆さん、よく覚えておいていただきたいと思います。ちょうど全青連が創価学会青年部の招待で昨日つきまして、今日あたり東京に来ておりますけれども、世々代々の交流が今でも続いているわけでございます。

1989年、建国40周年のお祝いに周総理ご夫妻の肖像画を画家に描いてもらったので、届けてくださいと池田先生から私が頼まれました。先生はその時は「鄧穎超さんに会わなくていいから、届けたらすぐ帰ってらっしゃい」ということでした。私と、ここに参加している聖教の記者川崎さん、通訳の洲崎さんとで行きました。届けて帰ろうとしましたが、鄧穎超さんが、池田先生のお使いで来たんだから、返すわけにいかない。是非家に来て下さいと言うので、おそろおそろ中南海の周恩来、鄧穎超さんの応接間に伺いました。この絵の前で、川崎さん、洲崎さん、私と記念撮影をしていただきました。鄧穎超さんも「鄧穎超が二人誕生した」とよろこんでおられました。

この翌年に池田先生が訪問しました。この画はちゃんと応接間に飾られてありました。その前で、先生、奥様、会長等、記念撮影をしました。鄧穎超さんも亡くなりましたので、中南海にあった絵は、今は天津の周恩来・鄧穎超記念館に永久に飾られてあります。

先生が周総理と会見した時、これは長年周総理が愛用していたペーパーナイフです。周総理の魂と思って頂いてください、ということで鄧穎超さんから頂いたものが、今牧口記念館に飾ってあるペーパーナイフです。その時に、鄧穎超さんが、これは私が今使っている筆立てですがこれも差し上げます、ということで頂いた。世界で周総理と鄧穎超さんの遺品を頂いているのは、池田先生ただお一人ではないかと思えます。

これは直接先生と関係がないのですけれども、二年前周恩来・鄧穎超記念館ができて、創価大学の周桜、周夫婦桜の絵も記念館に上げたいと先生に申しあげましたら、いいことだと。立派にしてあげなさいとって、差し上げた絵が次の絵でございます。周恩来・鄧穎超記念館はこのように展示してくれました。周総理が真ん中で、両サイドに周桜です。これが今周恩来・鄧穎超記念館に飾られてあるわけでございます。

(最後に鄧穎超さんの生の声を聞いていただきたいと思います。絵を差し上げ時に会見した時のテープです。)

周総理・鄧穎超さんとの歴史がずっと創価学会の中に生き続けております。たまたまこれは別件ですけれども、周総理は日本とフランスに留学していたんですけれどもね、フラ

ンスに留学していた頃の街の写真と、周総理が住んでいた家の写真をフランスの友人が送ってきてくれたんです。周総理の顔と何年から何年まで生きていたというものがその家の壁にはいったものをちょうど今日、送ってきて下さって、非常に不思議だなと思いました。フランスでも大切に顕彰しておりますし、創価大学も間違いなく周総理をだいじにしているわけでございます。

最後に参考消息を発見してくれた李徳安さんが、手記のなかでこう述べられています。「歴史は公正にして無情なるものである。人類社会におけるすべての実践活動及び現行は、いずれも歴史の審査と検証を経ずにはすまされない。」こういう一言を述べて送ってきてくれました。中国の諺に「水至れば水路となる」すなわち、水がたまれば必ず水路となつてずっと続くという意味です。世々代々友好は続くし、先生の切り開いて頂いた水は今現在水路となつて、とうとうと流れている。先生は日中友好金の橋というように表現されましたけれども、水も流れつづけるということで同じ意味でございます。

以上を持ちまして私の講演を終了させていただきます。ありがとうございました。